

長畝ふるさと通信

【2014年7号】

■ 癒しの風景



辺り一面、緑です。緑色は目に優しい色と言われますが、お天気の良い日に田んぼの真ん中に立ってそよぐ苗を眺めるとまさに癒しの風景です。近くをジッと見つめるのではなく、遠くをボーッと眺めるのがコツです。遠くから聞こえる蝉のけたたましい鳴き声も、心地よく聞こえるから不思議です。田んぼの時間はゆったりと流れ、美味しいお米を育てていくのです。

■ 草刈り三昧

7月になって梅雨らしいお天気が続くと、雑草も一気に伸びてきます。スパイダーモア1号・2号(右写真)は自走式で前進・後進はもとより、アームが伸縮式で畦の法面(傾斜面)も自在に操って綺麗に雑草を刈り取ってくれる優れものです。また、大きな河川敷の雑草は市の委託業者が大型重機を駆使して繁茂した雑草を片っ端からなぎ倒していきます。この時期の草刈りはお米の大敵「カメムシ」の住み処となる雑草を退治することで、少しでもカメムシ被害をなくすために一斉に行っているのです。



● トラクターに長いアームを搭載した重機は斜面の先まで手が届く「テナガザル」タイプ

● 真っ赤な重機は前のロータリーで草を根こそぎ刈り倒す「イノシシ」タイプ



■ 稲の後期栄養補給に穂肥散布、モンガレ病の防除も・・・

田植えと同時に散布した肥料を苗が吸収し尽くしてくると、それまで濃い緑色をしていた苗の葉色が淡くなってきます。「栄養補給の合図」です。茎の根本を割ってみると「幼穂(ヨウスイ)」と呼ばれるお米の赤ちゃんが来ています。この幼穂の長さを測って出穂時期を判断し、肥料を撒く時期や量を決めていくのです。散布時期が早すぎると、茎や葉っぱが栄養を吸ってしまい、肝心のお米が大きくなりません。反対に散布時期が遅いとお米の中の肥料が分解しきれず、食味が落ちてしまいます。



右写真はモンガレ防除の様子です。背中に動力散布機を背負い、粉剤を散布しながら田んぼの周辺を一周します(額縁散布)。7月後半、梅雨も明けサンサンと照りつける太陽の下、厳しい作業が毎日続きます。

■ 酒米・こしいぶきは出穂して穂揃いしました。



酒米は7月24日頃、こしいぶきは28日頃、それぞれ出穂して穂揃いしました。白い小さな花が咲いています。コシヒカリはお盆頃の出穂予定です。この時期、田んぼにはこんな生きものたちを見ることができます。

体長5センチはあるコガネグモ。大きな網を張って獲物を待ちます。敵が近づくと網を大きく揺らして威嚇してきます。



羽黒トンボは湿気の多い草むらに生息しています。蝶のように羽根を立てた状態で、4枚の羽根を重ねて閉じるのが特徴です。緑色の胴体は雄。ひらひらと舞う姿はどこか幻想的です。



無農薬栽培田んぼの主、アメリカザリガニです。体長は15センチほど。近づくと大きな両手のはさみを持ち上げて威嚇してきますが、つかもうとするとものすごい早さで後ずさり(彼らは前進できません)して逃げていきます。殻が固いので鳥たちにも食べられず、繁殖力が旺盛で、たちまち増えていきます。苗をはさみで切って遊んだり、畦に穴を開けたりと困った奴らです。

■ 大阪商談会

7月26日～28日まで関西方面へ営業活動に出かけました。連日30度を超す暑さで、佐渡とは大違い。セミの鳴き声も全く違います。

そんな中、お米屋さんからこんな話を伺いました。「日本人の月のコメ消費量は一人平均4.5kgになった。小売り価格も5kgで2,000円を割り込んでしまった」と言う。ちょっと前まで年60kgしか食べないと聞いていたので、さらに500g減った計算です。たかが500gとお思いでしょうが日本人1億1000万人の500gですから年間の減少量は66万トン。何とお米の生産日本一の新潟県の1年間の生産量とほぼ同じです(正確ではありません…あしからず)。こんな調子でお米の消費量が減り続けたら、我々コメ生産者は生きてはいけません。一方で信じがたい管理で話題となったマクドナルドが公表した原材料の原産地表示を見ると、日本が原材料の食材はレタスとチーズの一部のみ、圧倒的な海外依存食料です。日本の「食」はこれで良いのでしょうか？みんなで考えましょう！



■ 26年産米 年間玄米予約会員募集

26年産米の年間玄米予約会員を募集致します。みなさま、引き続き長畝の「朱鷺と暮らす郷コシヒカリ」をどうぞ宜しくお願い致します。価格は変更有りません。お米の消費離れによってコメ相場は下落の一途ですが、生産者の努力は決して下がってはいません。どうかご理解頂きたいと節にお願い致します。

